

関西学院大学地域・まち・環境総合政策研究センター研究報告 (9)

Research Note of Region, Town and Environment Policy Studies Center (9)

関根 孝道・益田 博

Takamichi Sekine and Hiroshi Masuda

第1 はじめに(関根孝道¹)

今回の研究報告は一本だけとなった。寂しい気がする。今回は頑張って2、3本の研究成果を紹介したい。本センター研究報告は、本学部研究科修士生の論稿を中心に、かれらが実社会の中で取り組む生の政策課題(イシュー)を取り上げ、総合政策的なアプローチを事例研究として提示することを目指している。今回も何とかこの目的を達成できたかと思う。

後掲の益田博「千刈キャンプと学生リーダー～奉仕のための練達者たちの日々～」は、これまで語られることもなく、知られることも少なかった学生リーダーの24時間を紹介するものである。千刈キャンプは何度も利用してきたが、彼らの献身的な活動の詳細は知らなかった—というか、知ろうともしなかった自分を恥ずかしく思う。舞台裏で黒子のように働く学生リーダーなしでは千刈キャンプが維持できないことが分かった。益田の論稿は寡黙な彼らの声を代弁するものとして重要である。彼らの思いは後述のアンケート内容から読み取って欲しい。学生リーダー育成プログラムも紹介されているが、災害救済・支援のボランティア養成プログラムとしても、応用が期待できそうである。今回の東日本大震災では、過酷な現地で自活できる熟練したボランティアが必要とされたが、千刈キャンプを拠点にそうしたトレーニ

ングの場を提供できると思う。関学の森として実践的な環境教育や農林業実習等の訓練場として千刈キャンプを活用することを提言してきたが、更に、災害ボランティアの知識と技能を体得する滞在型のトレーニング・キャンプとして利用しない手はない。

「言うは易く、行うは難し」の学是「Mastery for Service」であるが、千刈キャンプという修煉場で実践している学生リーダーたちの姿には、感銘を受ける。「立派なことを言う人は、立派なことをしない」「立派なことをする人は、立派なことを言わない」という。益田が紹介した学生リーダーたちの活動内容を知れば、その言葉の真意も分かる。口先だけの人がはびこる現代社会であるが、実践する集団である学生リーダーの存在を誇らしく思う。学生リーダーによって維持されてきた千刈キャンプであるが、いつまでも彼らの善意に甘えて許されるのだろうか。益田は、最後に、学生リーダーという「大学生のクラブ活動という性格上、体質的にあるいは時間的に超えられない限界—というか、より新しいサービスやプログラムなど千刈キャンプの可能性を開拓する上での葛藤を感じる」と総括している。学生リーダーたちが受難者でいいはずはない。それから先の、経営的な観点から千刈キャンプの快適な利用環境を整備していく責務は、教職員にあると思う。

1 関西学院大学地域・まち・環境総合政策研究センター長。

第2 千刈キャンプと学生リーダー ～奉仕のための練達者たち～(益田 博²)

1. はじめに

(1) 本稿の目的

関西学院大学に入学しても、千刈キャンプを知らずに卒業していく学生がほとんどである。学生の利用率を上げるには、まず学内(つまり学生だけでなく教員も含めて)での認知度を上げることが先決である。その手段の一つとして特別のご配慮を頂き、「『総合政策研究』の誌面で千刈キャンプの今を伝えてみては」と、お声掛けいただいた。ご厚意に甘え、これまで、「総合政策研究」No.36、No.37の2回にわたり、千刈キャンプの概要及び様々な教育プログラム展開の可能性について考察を行なった。

本稿では、千刈キャンプが多くの人材を育み、利用者から高い評価を得てきた学生リーダーについて触れてみたい。この誌面を通じて、千刈リーダーの今の姿を少しでも紹介することも意味あることであろう。千刈キャンプの教育力をリーダー育成という視点から考える機会としたい。

(2) 千刈キャンプの重要なプレーヤー 学生リーダー

センター棟が新築され、現在の形にリニューアルした1984年以降、千刈キャンプでは大規模な改装や改築はなされていない。30年も経てば、当時は最新式の施設でさえ老朽化してしまう。千刈キャンプは同種の野外活動施設と比べ、よく維持されているとこれまでの経験から個人的に思うのだが、古くなってきているのは事実である。

学校の宿泊体験や自然体験活動をターゲットにした民間の宿泊施設はもとより、利用料が無料あ

るいは廉価な公立施設などのハードやサービスと比べると、千刈キャンプの競争力は低いと言わざるを得ない。

一例をあげれば、ここには雨天時のプログラムエリアが極めて少ない。新キャビンだけでも150人近い収容力があり、夏場などは旧キャビンなどを合わせると200人を越えるキャンパーが滞在する日があるキャンプ場としては、かなりの不便さを利用者から強いている。特に、野外活動の定番としてははずせないプログラムである野外自炊は、雨天となると避難場所が限られており、とても窮屈なものとなっている。

このようなハンディにも関わらず、学内外で長年利用を続けている各種団体が高く評価しているのが、千刈キャンプの学生リーダーの存在である。

「(学生)リーダーさんがいるから安心して利用できる」という言葉を利用者から聞くのは千刈キャンプでは珍しいことではない。いわばハードの古さを人が提供するソフトでカバーしていると言える。

利用方法の説明に始まり、野外活動プログラムの支援から退所時の清掃確認まで、様々なサービスを利用団体へ提供するため、施設スタッフとしての働きを、学生たちはクラブ活動として行なう。施設(千刈キャンプ)が主体的にリクルートし、その趣旨に共感して集まった学生グループというだけでなく、学内の独立した一つのクラブの部活動に支えられているのが千刈キャンプの特色の一つである。

このように学生リーダー活動は、千刈キャンプのサービスの根幹である一方で、キャンパスから遠く離れた山中での活動のため関西学院全体として可視化されにくい存在となっている。アルバイトでもインターンシップや正課の一環でもなく、学校の施設運営の最前線に立つクラブ活動だということが、直ぐに理解されないのが普通だ。

2. 千刈リーダーとは何者か

(1) 50年を超える歴史の中での役割は変遷する

千刈リーダーは1955年の千刈キャンプの開設とともに生まれた。まさに「千刈キャンプの歴史は千刈リーダーの歴史でもある」。初期は、ボランティアの教職員の薫陶の下、キャンプ場の道作りやテントサイト整備などのワークキャンプや、来場する様々な団体がスムーズに野外生活を送れるよう黒子的な働きに徹していた。

自身が学生リーダーとして活動し、関西学院に入職してからも職員として千刈キャンプに長年関わった長尾は、「学生個々人が千刈キャンプを徹底的な奉仕の姿勢への挑戦の場にしたというのが、より正確な表現かもしれない」と振り返っている。

そのような時代からすると、かたくなに守られている伝統もあるのだが、現在の千刈リーダーの活動は大きく様変わりしている³。

(2) いま、千刈リーダーは千刈キャンプで何をやっているのか

年間利用可能な施設となっているため、利用客がある限りリーダーの活動も年中無休の体制にある。平日の利用のほとんどは金曜日の授業終了後のゼミなどの利用だが、月曜日から金曜日の間に団体利用があれば、どうにかして授業をやりくりして駆けつける。彼らがいなければ成り立たない現状ではあるが、千刈キャンプ担当である前に学校の職員である立場からは、こういった活動のあり方を見て、私は複雑な気持ちにもなる。

千刈での彼らの一日は長い。その日のスケジュールを確認し、宿泊場所の点検を手早く済ませ、やってくる団体を待ち構える。到着すれば、

施設利用についてのオリエンテーション、プログラム責任者との打ち合わせを行い、並行して、グループに分かれ、プログラム進行を先回りして様々な準備を行い、夕方からは野外自炊のお手伝いやキャンプファイターの準備進行、そして、後片付けへと息つく間もない。プログラム時間が終了する午後10時30分からは、各所の戸締りや火元の点検などで場内を歩く。戻れば、翌日の打ち合わせ、ミーティング、そして一日の最後となる祈りの時間が終われば、時に真夜中近くになることもある。翌朝は6時前後には起き出し、プログラムエリアを整え利用者が使えるよう準備を始める。

素朴なキャンプ場を学生の気力と体力で支えていた時代ほどの過酷さはないものの、今でも精神的にも肉体的にもかなりきつく、濃密な時間を過ごしている。夏のピークシーズンには1週間近く滞在することが普通であり、出番の多いリーダーでは1年の半分近くを千刈キャンプで泊る猛者もいるほどだ。

(3) 活動風景の紹介

以下に、リーダーの活動内容の一端を写真で紹介する。



利用団体へのオリエンテーション

3 これまでのリーダーの活動内容の詳細に関しては、関西学院千刈キャンプ開設50周年記念誌などを参照願いたい



プログラムの援助(子どもたちの安全と楽しさのバランスが難しい)



ワークでの草刈機操作中の様子



緊急時の初期対応訓練も重要なリーダー活動

(4) 現役の大学生リーダーは千刈リーダー活動をどう評価しているのか

リーダーが活動にやりがいを感じているのは言うまでもない。

同時に彼ら彼女たちが不安を感じた、不満を持っている点も多い。個別・具体的に改善できる点も多いが、結局のところ、千刈キャンプの位置づけや今後期待されるあり方と、学生のクラブ活動としての参画のあり方をどう調整していくのかが、学生との関係において最重要課題の一つではないだろうか。

上述のような問題意識をもとに、2010年秋に現役リーダーに既述式のアンケートを行なった。回答の中から、現役リーダーたちが自分たちの活動や千刈キャンプとの関係をどう評価しているかを紹介する。

【リーダー活動を続ける上で疑問や不安、不満に思うことはなんですか？】

<学業との両立>

- ・ 学校を休んでまで平日にローテ(リーダー活動)をするのは大学生として間違っている。
- ・ 学業との両立が難しい。
- ・ 平日ローテーション活動について、結局、学生がすべきことが何なのか全く分からない。
- ・ 平日にキャンパーさんがいて、ファイヤーなどリーダーがいないといけないプログラムを行なうこと。
- ・ 学業がおろそかにならないか。
- ・ 平日やテストがある日にも千刈に登らなければならないこと。自分たちは両親が汗水たらして稼いでもらっているお金で学校に行かせてもらっているのに、学校などを犠牲にしてまでこの活動することに意味があるのか

＜事務室・関西学院との関係＞

- ・事務室とリーダーの立場、関係(キャンパーの受け入れ、お互いの業務範囲・自己決定権の範囲)
- ・夜間の体制
- ・場内のセキュリティ
- ・これからの千刈キャンプと千刈リーダーズクラブとの関係。どちらが欠けても千刈キャンプの運営はできない。しかし、学生も千刈も昔のような千刈キャンプの運営方法では今後うまくいかないと思う。ex.平日ローテ、テスト期間、祝日授業、主催キャンプ etc…

【できる・できないはともかく、千刈で改善すべきことは何でしょうか？千刈キャンプ事務室や関西学院として取り組んでほしい、取り組むべきことは？】

＜リーダー活動＞

- ・平日に千刈に行かざるを得ないリーダーへの支援。
- ・あくまで部活動でやっているということを、十分に理解してほしい。
- ・千刈キャンプの利用、存在目的、意義を、明確にしてほしい。(明確にあるのであれば、リーダーに伝えてほしい。)
- ・学院の決定の過程や理由を知りたいし、リーダー側の声を聞いてほしい、そういう場を作ってほしい。
- ・平日ローテの廃止。(学業優先にしてほしい。)
- ・学業とリーダー活動の兼ね合い。平日ローテの有無。備品等の充実化。
- ・リーダー活動を見に来てほしい。(現状等含めて)
- ・千刈キャンプも50年をすぎており、建物の老朽化が気になる。ex.旧キャビン、旧センター棟、ベーツキャビンetc

＜大学に対する働きかけ＞

- ・もっと千刈キャンプのことを宣伝して欲しいです。関学に入学したら、一度は千刈に来てほしいので学部ごとに新歓として、千刈を利用してほしいです。
- ・もっと千刈をアピールしてほしい。

3. 千刈キャンプのリーダー育成について

(1)2010年度の研修より

千刈キャンプ主導で2010年度は以下のようなスケジュールの研修を行なった。

月日	名称	内容	企画運営
5月15日(土)～ 16日(日)	リーダーオリエンテーションキャンプ	千刈キャンプやリーダー活動の体験	学生 リーダー
5月22日(土)～ 23日(日)	リーダー養成キャンプ①	自然観察 サバイバル(野営)体験	千刈 キャンプ
6月5日(土)～ 6日(日)	リーダー養成キャンプ②	コミュニケーション 実習 レクゲーム実習 消火訓練	千刈 キャンプ
6月26日(土)、 7月4日(日)	救急法研修	メディックファースト アイド(Basic)	千刈 キャンプ
7月26日(月)	リーダー委嘱式	千刈キャンプから リーダー個人に対し て委嘱状を授与	千刈 キャンプ

この表からも分かるように、学生のクラブ活動としてのトレーニングと、関西学院千刈キャンプのスタッフとして最低限度の知識や心構えを身につけるための、いわば業務上の研修に近い領域が重なったスケジュールとなっている。

(2) 学生たちへの効果

学生リーダーたちへの感想を聞いたところ、やはり野営のインパクトが最も高かった。テントを

用いない野営はここ数年間にない新しいタイプの研修として学生リーダーから評価が高い。直接、リーダー活動(特に黒子的な働き)に必要な技術や知識の研修ではない。しかし、こういったある種の極限状態(所謂サバイバル状況)の経験はほとんどの学生にとって生まれて初めてであり、仲間と(彼らにとっては)厳しい環境で生き抜けたことが達成感や自信となっているようだ。

2010年度の研修の中で印象的だったものは?という問いに対する答えとして、例えば、次のようなコメントがあった。「ブルーシート2枚でテントをつくって一晩過ごしたときのことです。今までにはない経験で正直戸惑いましたがブルーシートや竹だけでも生活できたことで、グループで協力することの大切さも学べたので、とても印象に残っています」

リーダーたちは、例えば、野外教育や環境に関する興味があって入部するものはほとんどいない。アウトドアが好きで入ったと言う学生もあまりいない。多くが、大学新入生オリエンテーションキャンプで前に立つ千刈リーダーの存在が直接のきっかけで入部し、トレーニングが始まって活動の実像を知らされるのがほとんどだ。

それだけに施設としてはリーダー研修に力を入れるべきなのだが、(クラブ活動としての)主体性を尊重する観点とタイトなクラブスケジュールの為、余裕がなく、十分な研修環境が整えられていないことが担当者としては歯がゆい思いである。

4. 組織キャンプの運営ノウハウとの比較

(1) 組織キャンプとは

大学を中心とする総合学園の附属施設として、またミッションに深く関わる場としてユニークな歴史を持つ千刈キャンプであるが、記録などを読むと、そのモデルの一つはYMCAやアサヒキャ

ンプ(朝日新聞厚生文化事業団主管)などで代表される教育的なキャンプ手法「組織キャンプ」であると考えられる。

組織キャンプの関西の草分け的な民間団体(大阪YMCA、大阪青少年活動振興協会、朝日新聞大阪厚生文化事業団など)である「組織キャンプ研究会」によると、「社会的に責任のある組織・団体が、なんらかの教育的な意図、目的を掲げ、その目的が、効果的に達成できるよう、十分な計画と準備を行ない、計画から実施に至るプロセスにおいて、キャンプの組織、責任、指導体制を明確にし、キャンパーの正しい把握と理解にもとづいて、プログラムを展開し、それらすべてを統合してよりよく機能しているキャンプ」を、組織キャンプとして定義している。その上で、組織キャンプの基盤をなすものとして、以下の5つの概念をあげている。

- ①組織的に行なわれていること
- ②意図、目的をもって行なわれていること
- ③立案から実施までのプロセスを重視
- ④指導者が存在すること
- ⑤キャンパーの正しい把握と理解

(2) 千刈キャンプの組織

上記の5つのポイントを念頭に今の千刈キャンプを考えてみる。千刈キャンプのフロントスタッフの配置は、現在、以下のようになっている。

事務室には専任職員をはじめ、事務職員3人が配置されている。しかし、主たる業務は事務仕事である。フィールドへ出て、利用客の活動支援やプログラム指導を行なうことができる常勤職員は、専任職員1人のみであり、事実上、学生リーダーが利用者へのプログラムサービスのほぼ全てを担っている。さらには、事務職員が勤務している日中はともかく、夜間はセンター棟の管理人を

除けば学生だけで対応しているのが現状である。

かれらが属するのは、関西学院が目指す教育の本質に共感し、教職員と協働しながら千刈キャンプを守り育ててきた長い歴史を持つクラブだ。彼らには先輩から引き継いでいるノウハウやアレンジを加えながら更新し続ける活動マニュアルなどがある。また、自分たちが守り育て後輩たちに引き継ぐキャンプ場だということで、活動に対するモチベーションが非常に高い。しかし、やはり大学生のクラブ活動という性格上、体質的にあるいは時間的に超えられない限界というか、より新しいサービスやプログラムなど千刈キャンプの可能性を開拓する上での葛藤を感じるのも正直なところだ。

利用者へよりよいサービスを提供するという共通の目的を持ちながらも、仕事とクラブ活動という異なる関わりや立場から生まれる様々な葛藤を前向きなエネルギーに変え、どう両者(学生と事務室)で折り合いをつけ協働していくのが、千刈キャンプの永遠の課題であるようだ。

5. 今後の課題

千刈キャンプリーダー活動の再評価

千刈キャンプの認知度が低いことにも関連するが、リーダーの存在や彼らの活動の意義が検証されてもよいと思う。

特にキリスト教主義教育を目指す関西学院が、キャンパスの教室以外で、体験を通じて学ぶ場、他の学生やさらには教職員との密度の高い共同生活の場を守り続けていることは、関西学院の本質的な姿を残しているといえるのではないか。

そのような場を通じて学生たちが何を感じ、学び、生涯の糧にしていくのかを明らかにすることは、千刈キャンプの教育力を考える上で必要なことだと考える。

また、同時に、国内外の他大学での先行事例や関連する領域での教育プログラムについても取材を行い、関西学院千刈キャンプの独自性や今後の進むべき方向性を考えていく必要を感じている。

6. 最後に 結びに代えて

「施設の良さはサービスで、そしてサービスの良さは人で決まる」。これは、野外教育の世界で出会った先輩から教えられた言葉である。より多くの集客数や学内での評価を高めるためには、サービスの向上が不可欠である。

また、今後、千刈キャンプがより幅広い利用者により多く役立つためには、学生リーダーだけに依存しない、独自の指導者陣を開拓していくことが必要だと考えている。

現在のリーダーたちにとって大切なことは、関西学院のスクールモットーでもある「mastery for service」の実践活動である。学生の自主的な活動であるクラブ活動と、事業としての千刈キャンプを切り離して考えることが必要であろう。学生たちのクラブ活動を尊重しつつ、関西学院としてなすべきことの中で千刈キャンプでこそより良くできることを取捨選択していくことが大切になると思っている。

以前にも触れたことであるが、関西学院全体の貴重な資産として、整備されたキャンパスの教室ではできない体験や学びの場を提供し、「キャンプ場」から「森のキャンパス」へ進化させ、より多くの人たちから「選ばれる」関学の森にしなければ千刈キャンプは室の持ち腐れになってしまう。

参考文献

関西学院千刈キャンプ2005「Campers first 関西学院千刈キャンプ開設50周年記念誌」

